

第20話（12頁） ミーチカときのこ

ミーチカが家にぜんぶ持ち帰れないほどのきのこをとりました。ミーチカはきのこを森に集めておきました。夜明けとともにミーチカはきのこをとりに出かけました。きのこがなくなっていたので、ミーチカはなきだしました。おかあさんがミーチカに言いました。

「なにをなしているの？ おやおや、おやつを食べたな、ネコのやつ？」

すると、ミーチカはおかしくなって、顔のなみだをふきながら、自分でも笑ってしまいました。

「泣き出したミーチカが、お母さんの一言で笑ってしまった。そこが、この話のポイントだよね。」

「ユーモアというか、機転を感じさせる。」

「そもそも、ネコってきのこは食べないんじゃないか。」

「確かに、食べないよね。ミーチカもネコが食べないと知っていた。だからこそ、お母さんもありもしないのに、ネコのせいにして…と思わず吹き出しちゃった。」

「しょげているミーチカの心を和ませようと、こんな話をつくったというわけか。」

「ミーチカはなぜ、きのこを採りに行ったのか。やっぱり、お母さんに頼まれたからだろうし、持てる分は、家での料理用に持ち帰ってきたのだろう。」

「キノコ採りをしている間に面白くなって、必要ない分まで採り尽くしちゃった。うちの田舎に竹の子がいっぱい生えていて、その時期には後先考えずに片っ端から引っっこ抜きたくなっちゃう。ミーチカの、その気持ち、分かるなあ。」

「そんな高揚した気分もあって、夜明けが待ち遠しく、再びいそいそと集めておいた場所へ行ったら、なんと、みんななくなっている。落胆ぶりが目に浮かぶようだ。」

「だから、お母さんも、落胆したミーチカを見ておれなくてとっさに機転を利かせた。」

「お母さんの言葉が日本語でも面白い。『おやおや、おやつを食べたな、ネコのやつ？』って、〈おや〉が3回、〈やつ〉が2回も続いている。ダジャレのようにも、韻を踏んでいるようにも思えるよ。」

「ロシア語の原文でもきちんと韻を踏んでいる。同じ部分を直訳すると、『そして/私たちの/クッキー（複数）を/食べた/ネコたちが』となって、5つの単語とも『イ』というような音で終わっている。」

「その雰囲気は日本語訳でもうまく伝わってくる。随分と考えた訳だね。」

「日本でだって、お母さんが子どもの気を引くために『ちちんぷいぷい』なんて言ったりするのと、同じ感覚じゃないのかな。」

「最後の疑問符も効果満点だ。抑揚と、その場の雰囲気までしのばれるよ。」

「持ち帰れなかったきのこは、誰が持って行ったのか。きのこを食べる動物はいないだろうし、なんていう疑問は残るけど、本筋ではないからこだわらないでしょう。」